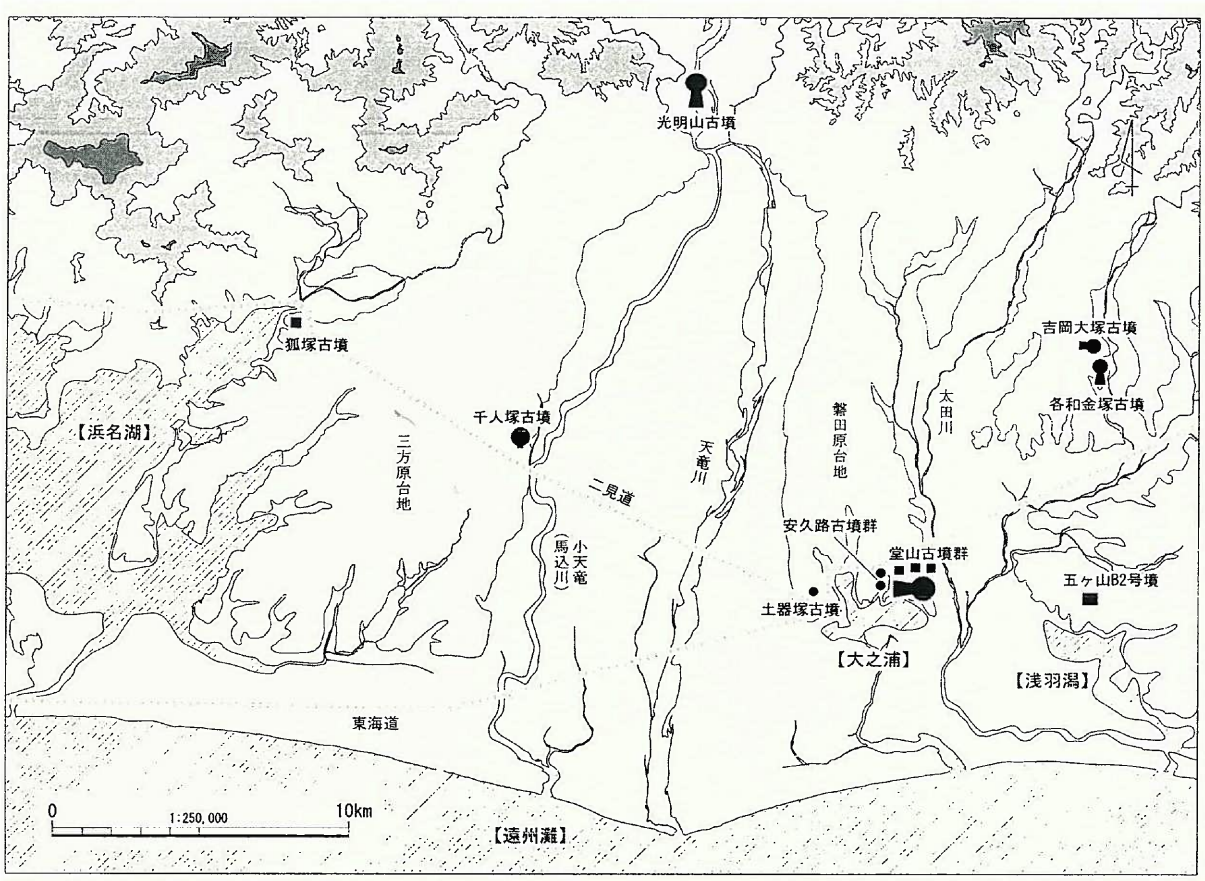
光明山古墳現地説明会資料

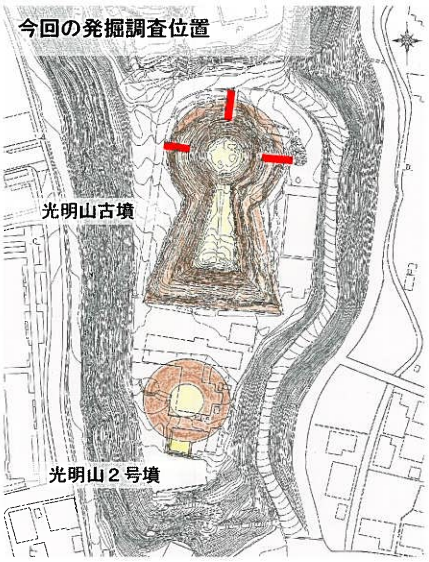
2018年4月29日

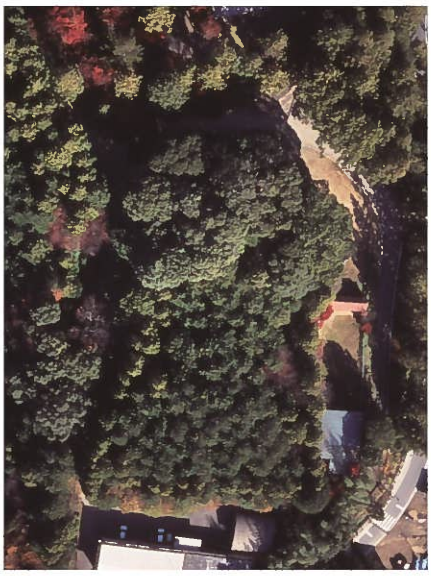
浜松市文化財課

光明山古墳の発掘調査で判明したこと

浜松市文化財課では、天竜区山東にある大型前方後円墳、光明山古墳（全長８２ｍ）の発掘調査を2018年に初めて実施しました。光明山古墳は浜松市内で最も大きな古墳であり、この古墳が造られた５世紀中ごろ（樹立された埴輪の特徴から推定できます）に限定すると、静岡県内でも最大規模を誇ります。この度実施した発掘調査によって、光明山古墳の後円部は二段につくられており、それぞれの斜面には葺石（ふきいし）が施されていることが新たに判明しました。葺石の遺存状態は北側で特に良好で、古代の土木技術を知る上で注目できます。また、中段のテラスと墳頂部では埴輪が集中して出土していることから、埴輪列があったおおよその位置もうかがえるようになりました。



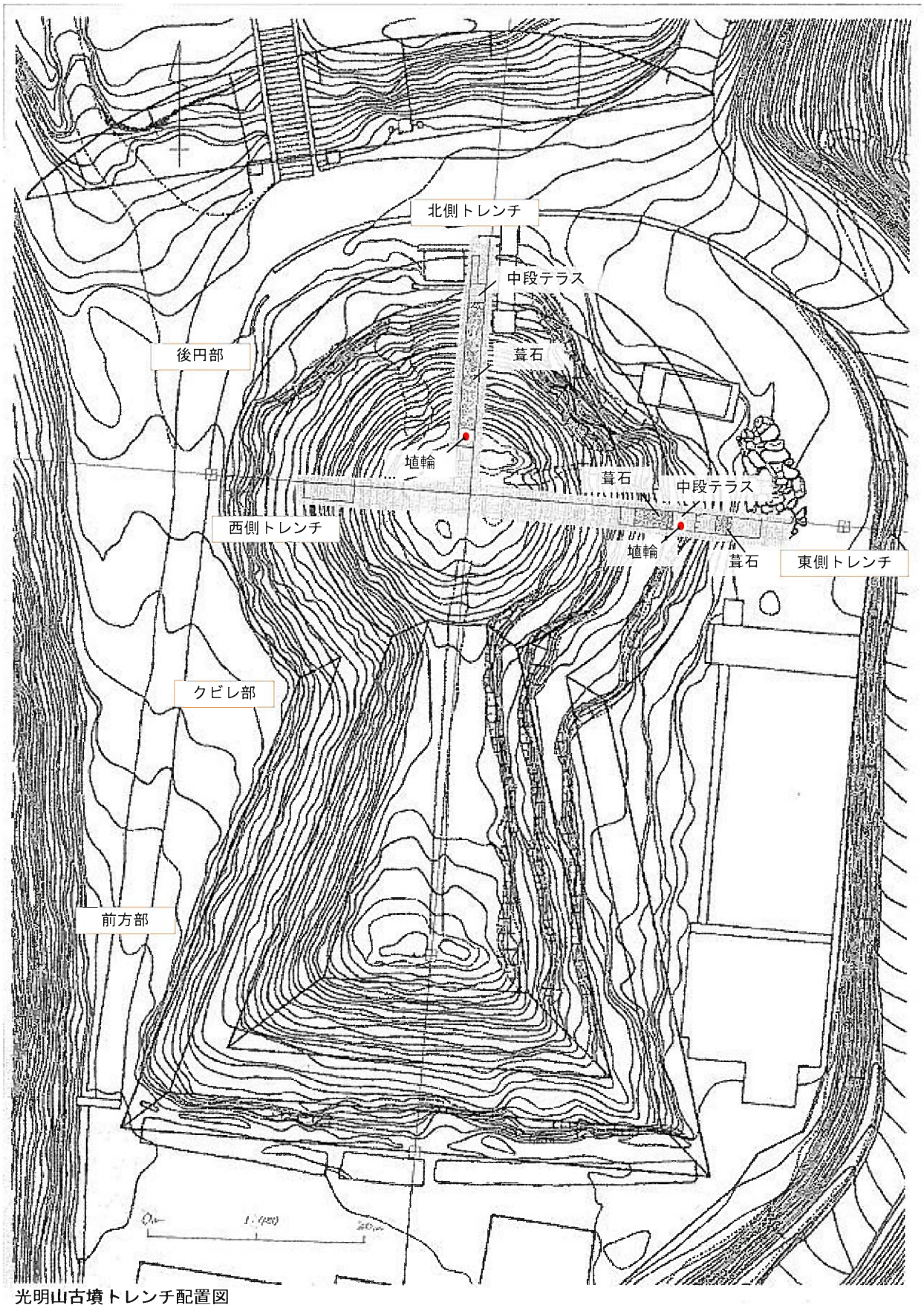




光明山古墳の位置と環境

光明山古墳は天竜川をさかのぼった浜松市天竜区に築かれています。周囲には大型の古墳がない点は立地環境の大きな特徴です。

光明山古墳の南側には光明山２号墳と呼ばれる古墳がありました。光明山２号墳では全面的な発掘調査が行われ、直径33ｍの円墳で南側に造り出しと呼ばれる方形の平坦面が付属していることが明らかになっています。

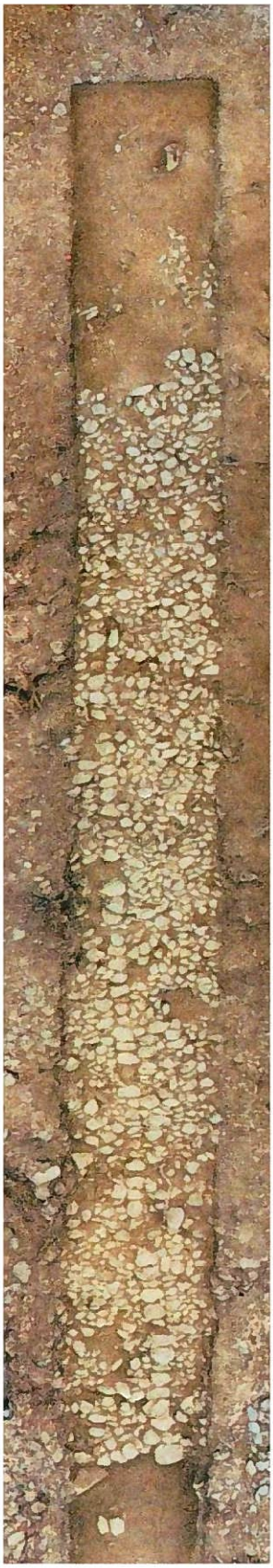


光明山古墳トレンチ配置図

後円部の３ヶ所において、墳丘の構造を把握するためのトレンチ（幅 1.5m　総延長約 32m）を設けて発掘調査を行いました。後円部の高さは 9.6m、一段目の高さは 1.8m、二段目の高さは 7.8m。二段目の高さは一段目のそれと比べて４倍以上あり、その独特の形は近畿地方中枢部の大型前方後円墳とも似通ります。光明山古墳の被葬者と倭王権との強い関係がうかがえます。

北側トレンチ（後円部上段の葺石）

北側トレンチで確認した上段の葺石は、基底部から最上部まで遺存していました。基底部や区画帯には大きい石材が用いられていることも明確です。これだけ状態のよい葺石はあまり例がなく、大変貴重です。



北側トレンチ俯瞰

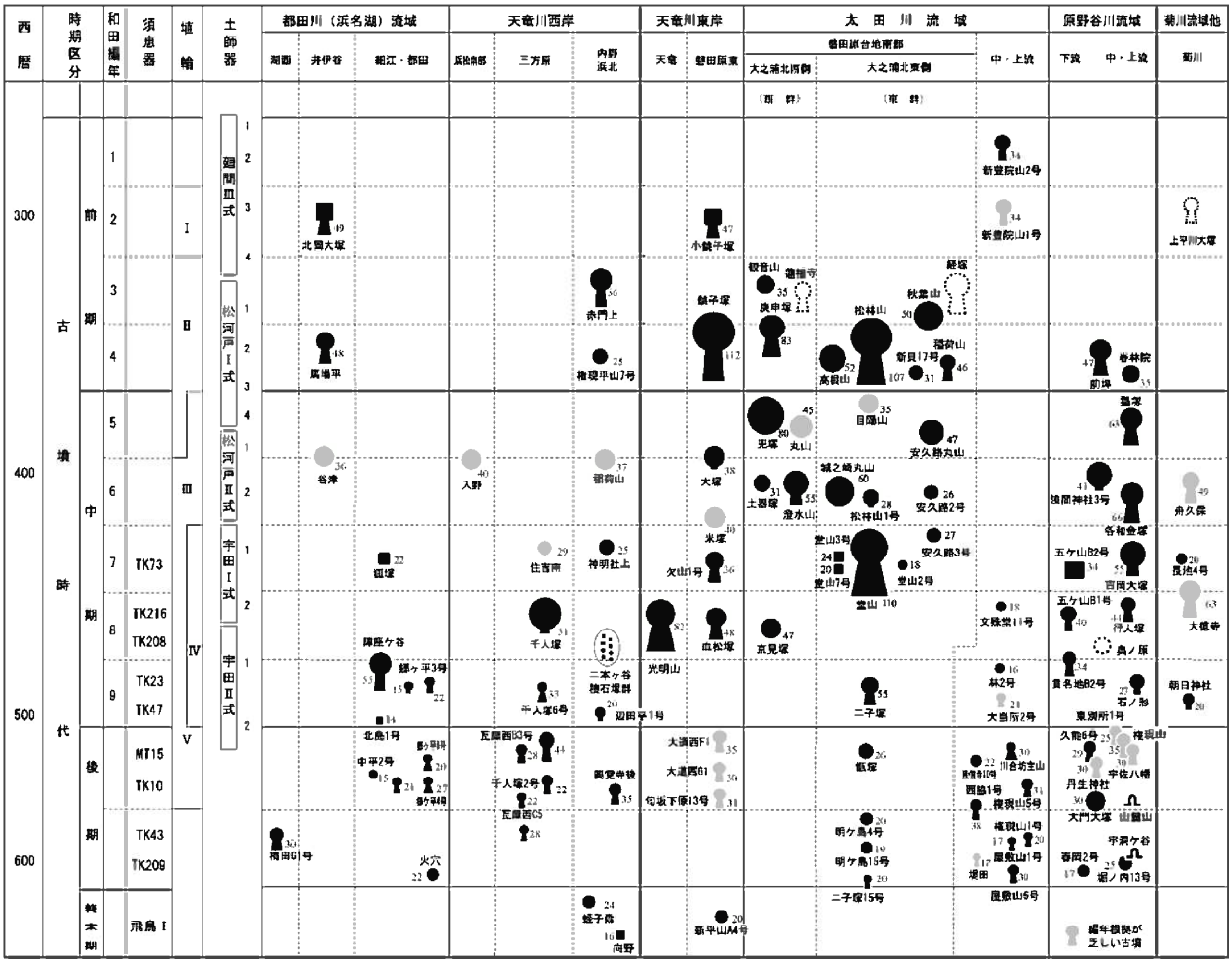
葺石の施行単位とみられる縦方向の目地の石列が明確です。

東側トレンチ

東側トレンチでは、第一段目と第二段目の基底石が確認できました。中段のテラスも明瞭で、その幅は２ｍほどです。

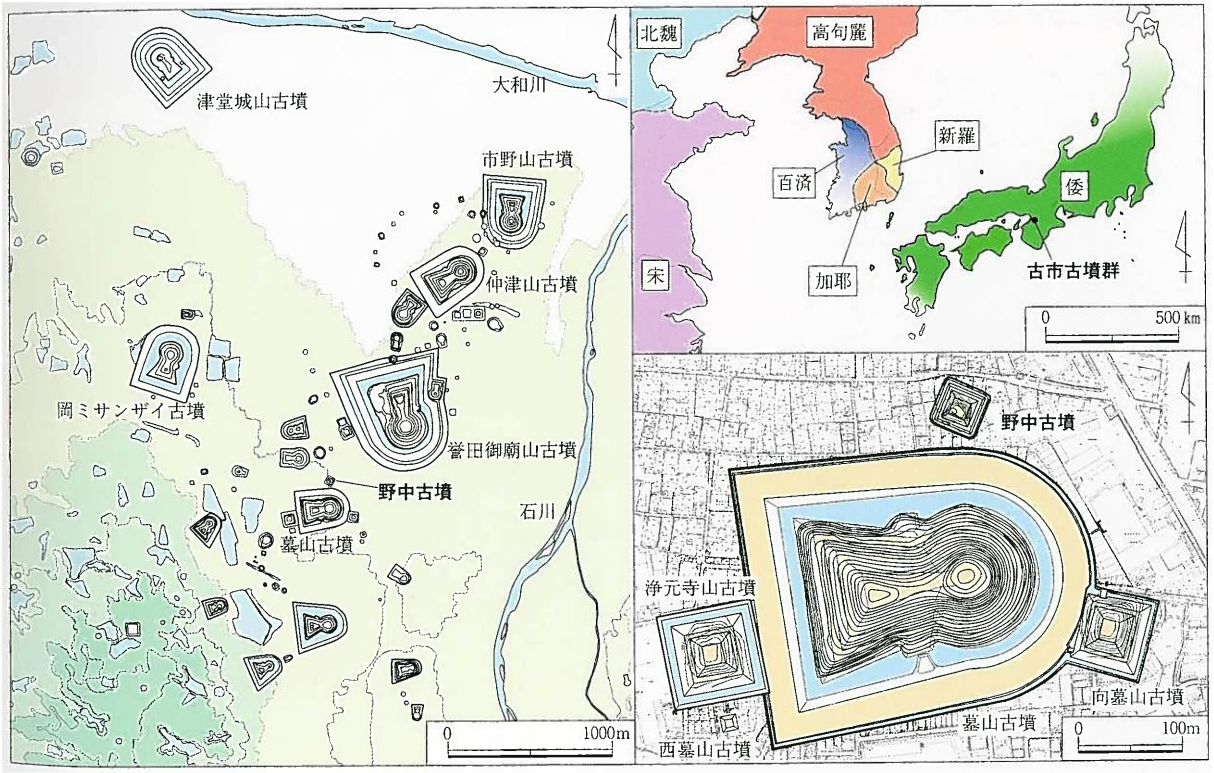
埴輪が出土したようす

東側トレンチの中段テラスでは、円筒埴輪がまとまって出土しています。



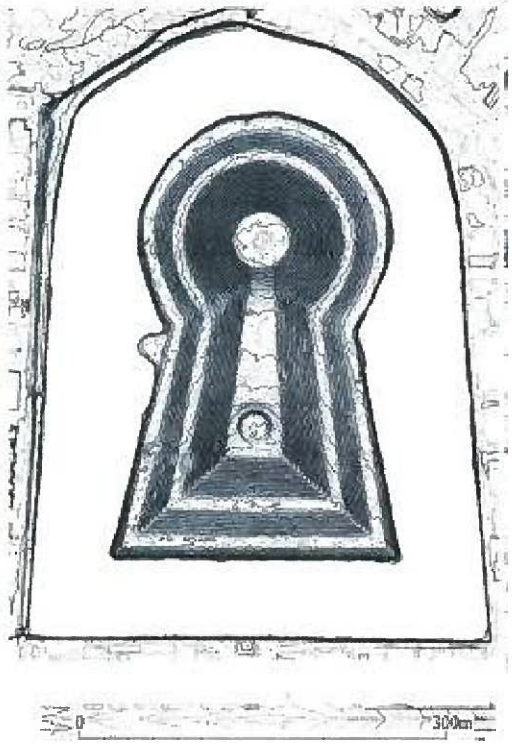
遠江における古墳の移り変わり

静岡県西部地方にあたる遠江でも多くの前方後円墳が築かれていますが、全長 80ｍを超える大型古墳は４基しかありません。古墳が構築された５世紀中頃に限れば、光明山古墳は静岡県内でも最大の大きさです。



畿内大型古墳群の分布と測量図（『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学出版会より）

現在の大阪府や奈良県には、全長 300mを超えるような超大型の前方後円墳が知られています。巨大前方後円墳は墳丘を三段につくり、周囲には水堀をめぐらせます。光明山古墳の形はこうした巨大古墳と共通する部分があり、設計図を共有していた可能性が考えられます。



光明山古墳と墳形が似る近畿の巨大前方後円墳

左：上石津ニサンザイ古墳　右：誉田御廟山古墳